

# 田山花袋『時は過ぎゆく』研究

伊 狩 弘

## 1

『時は過ぎゆく』<sup>(1)</sup>は大正五年九月に新潮社から刊行された自伝的長編小説であり、田山花袋に連なる一族の明治史の様相を呈する小説である。その一族の有為転変を見守った目撃証人とも言うべき人物は青山良太である。青山夫婦のモデルになったのが、花袋の叔母まさとその夫の横田良太であり、天保十年生まれの良太は長寿を保って大正六年一月まで存命したので、この小説は一見したところは良太叔父の死を目前に控え、花袋が一族へのレクイエムを書き綴ったものとも見られる。<sup>(2)</sup>しかしその底にあるものは果してレクイエムを奏する祈りの心だけなのであろうか。小説に直接書かれた時間は明治七年から大正五年までの四十数年間であるが、それ以前に秋元藩が山形から館林に転封された前史や明治維新前後の混乱、花袋が有隣堂に丁稚奉公に出され、ちよつとした過ちのために帰されたといった失態まで含まれる。つまり『東京の三十年』(大正6・6)に殆どそのまま重なり、『蒲団』(明治40・9)や『生』(明治41・4・7)の内容を包み込むように、明治から大正初期までを生きた一家系を網羅的に描いたのがこの小説であった。明治末から大正初期にかけては、長兄実弥登と国木田独歩の死、飯田代子との出会いと離別、自身の博文館退社そして島崎藤村の渡欧、小説壇の新傾向の跳梁といったように花袋の周辺には変化の波が来ていた。そして花袋も四十歳を超えて中年の域に達したことも手伝って、心境に変化を来し、しだいにデカダンスの心境に陥ったと見られる。その結果として花袋に特有

の廃墟の人生観や廃墟の人生の記録などが生み出され、また「デカダン」からの脱出を図るために愛欲に感溺する、若しくは利己主義的な欲求に耽溺せんとする『残雪』（大正6・11・17・7・3・4）のようなユイスマンや宗教に近づこうとするような小説が生まれた。しかしそれらが小説であり、虚構であるからには花袋の創作意識や文学者としての自意識などが関わることになる。花袋文学の根底にある喪失感のような感情は廃墟感覚や無常観につながるものであり、またそれと相俟って人生に対する倦怠感や虚無感いわゆる「デカダンス」の感覚は愛欲の飢渴感へと通じているものであろう。しかし花袋は昭和三年末に倒れるまで日本中を旅行し、また日露戦争従軍と二度の満州朝鮮旅行をするなどの外遊も体験した。そしてそうした旅行の体験、また飯田代子との情交に基づいた大量の述作を病に倒れるまで途切れることなく書き続けた。この旺盛な生活力と創作力は決して無常観や頹廢的生活からは生まれるものではない。従って花袋の「デカダン」や廃墟の人生観は創作や人生のモチベーションやインセンティブといった性質のもので、花袋を人生の敗残者や厭世者にするものではなかったと言えよう。本論考ではその辺りの機制を考え併せて花袋文学の本質に迫りたい。

『時は過ぎゆく』は主人公と言える人物はおらず、前述したとおり青山良太が全体に登場する主人公のような存在であるが、この人物が特に中心ではない。またこの小説は一つの物語をなしているわけではなく、さまざまな人物が現れては消えてゆく絵巻物のような小説で、青山良太はその絵巻物全体に現れ、他の人物を見ているのである。小説の書き出しは『何うも大変だ。』あたりを見廻すと、良太はかう太息しない訳には行かなかつた。」という、青山良太が田舎から上京して、東京近郊の荒廢した屋敷に立った感懷から始まったのである。しかしこの小説は、具体的な人名、地名が明確に書かれているわけではなく、良太の出身地が館林だとは書かれないし、廃墟のような屋敷が新宿角筈あたりの館林藩の下屋敷跡地であることも明確には分らない。しかし「二休此処の邸は、お家の先祖が、甲州の谷村から来ると、一日路で、日暮に此処に着くので、始めは庄屋などに宿を取つてをられたが、何うかして一軒、邸が欲しいと言ふので、それで、此処に地所を買つて、下邸をお拵へになつた。もとはあの十二社の熊野の社が此処にあつたといふことだ。だから、御維新の時にも、此処の邸だけは、お上に返さなくとも好かつたのだ。」（九）という会話が岡田彦太との間に為されるので、この荒れた屋敷が甲州街道の東端、現在の新宿中央公園一帯、公園内に今も熊野神社のある辺りで

あると分る。そこは館林藩の藩主秋元家の下屋敷即ち郊外の別荘的なものだったらしく、甲州谷村とあるのは武蔵の川越近辺の地名のようである。というのも館林藩主秋元志朝ゆきともの先祖の所領は川越で、それが後に山形高嶺に移封され、江戸末期に館林に国替えされたのである。岡田彦太は花袋の祖父田山穂弥太（綾見彦五郎）で、この会話の為されたのは大体明治二十年頃、花袋の兄が臨時修吏局の書記になって生活がやや安定したので一家を挙げて上京した後のことである。市ヶ谷富久町に住んでいた穂弥太は久しぶりに新宿角筈にいる娘のまさ（作中のおかね）とその夫の横田良太に会いに行った、その際の会話という設定である。花袋はまだ十五歳程度で軍人志望だった。穂弥太と良太は二十八歳の違いがあるが、それでも旧藩時代の思い出を共有していた。穂弥太は下級の士族であり、良太は元は農民だったが次のような経緯で足軽になった。

良太は生れながらの侍ではなかった。かれは城を取巻いた沼の向うの村で生れた。その妹は城下の町の小商人の妻になつてゐた。しかしかれは祖先伝来の百姓に満足しては居られなかつた。かれは若い頃に、今の主家の仲間に住み込んで、それから足軽になつた。主家は代々藩の家老をつとめるやうな立派な家柄なので、江戸と田舎との間をかれは何遍往来したか知れなかつた。（一）

このような経歴を経て足軽になった良太はやがて幕末も近い頃に「藩の侍分の家に養子に入り込んで、もう一廉の侍になつてゐた」ので、花袋の叔母のまさと夫婦になつたわけであろう。ところが武士の世の中は壊れ、武士も農民も関係なくなつたため、養子の良太が家名を守る必要がなくなつた。そこへ明治七年に館林の大火があつて城下はみな焼けた。良太の家も焼けたのである。その時、主家の縁戚である「勤王家」から新宿の下屋敷の保全、修復といった仕事を任された。この「勤王家で学者の旦那の家は九段の方」（二）であつたが時々屋敷を見に来た。九段の家にはおかねの姉のおつる（花袋の叔母いる）が奉公しており、旦那の妾付きの女中のような存在で、後に井戸に身を投げるのである。この旦那の実名は出てこないが、モデルは岡谷繁実おかのやしげとね（天保6・3・12〜大正9・12・9）という幕末から明治、大正の時代に波乱に満ちた人生を送つた人物で、花袋の兄実弥登と大きな繋がりがあり、間接的に花袋とも関係が深い。<sup>4</sup>幕末から明治二年に亘つて一九二人に及ぶ武将たちのエピソードを綴つた『名将言行録』を著したことで知られ、明治

十一年には内務省に出仕した後に修史館御用掛となった。岡谷はなかなかやり手だったらしく、豊島区角筈村の下屋敷跡地を買って寒香園という梅の名所にし、後には「巴ビール」というビールまで作った。小説中には「其頃、奥では人を多勢入れて、麦酒醸造などを始めてゐた。そのために、別に裏に一軒、家を建てて、機械や道具を据ゑたりなどした。外国人の技師などがやつて来て、邸の中を歩いてゐたりした。その技師の名をカアルスロップと呼ばれた。」(十八)とある。岡谷については小説の中に次のように書かれている。

旦那は学者でゐながら、一方稼穡の道にも長けてゐた。広い邸の中を日曜などにはぶら／＼歩きながら、土地に対する種々な計画を立てた。梅の若木を安く買って栽ゑさせたのも、竹藪を段々大きくさせたのも、皆な旦那の意見であつた。ある日には、奥の林の縁で働いてゐる良太を捉へて、『良太、良太、好いことがある。茶を植を栽ゑろ、茶を栽ゑろ。茶ならきつと旨く出来る。十年後には立派なものになる。狭山茶つてな、この奥に行くと、茶が沢山出来る。』かう言つて、茶樹の苗を沢山買つて、それを梅の木の下に一杯に栽ゑさせた。(六)

岡谷繁実の事績や経歴を調べるのは本稿の中心課題ではないが、岡谷は『浮世能夢』という自伝を書いており、その中に「寒香園記」がある。それによれば「明治四年東京府下南豊島郡角筈村ナル旧藩邸八町七反九畝十九歩九年改十七町四歩購求シ其十月十八日浜町ノ邸ヨリ移住ス戊申乱後藩士悉ク館林ニ帰住シ久シク人ノ居住ナキヲ以テ邸内荒無ヲ極メタリ」とあり、『時は過ぎゆく』に書かれたのとは少し違う。しかし大体現在の新宿中央公園全体(新宿副都心の一部も含まれる)が寒香園であつたと見られる。岡谷は続いて、移住した当初は狐が巣を作っていたところに仮の家を建てて、明治五年にはほぼ開墾し終えた。六年に梅を植え、七年は茶を植えた。いろいろの木を植えたり、製茶場を建てたりもし、「二十年裏長屋五棟新宅一戸ヲ新築シ麦酒醸造ヲ始ム」という。岡谷は非常に几帳面な性格だったらしく、「四年十月十八日ヨリ二十一年十二月三十一日マテ支出金四万七千三百六十六圓四十六錢三厘収入金貳万八百三十四圓五十一錢二厘ナリ」といった細かい収支勘定を記録している。これを見ると開墾の収支は大赤字で、十七年間に二万六千円余りの赤字、いまの力ネにしたなら二億円以上の赤字を出した計算になる。お茶や梅を植え、麦酒を作るなどの庭園業はやはり儲からなかったことが窺える。そして『時は過ぎゆく』では旦那の命令を受けて良太が主として働き、かなり成功したよ



うに描かれているが、これだけの知恵を絞り投資をして赤字を出したというのは岡谷繁実自身の奮闘が大だったことは間違いないだろう。花袋はおそらく良太からの伝聞と想像で書いたので事実とは異なる面も多くなつたのは已むを得ざる<sup>(6)</sup>ところである。やがて寒香園は淀橋浄水場になつて明治三十一年に通水したと伝えられる。工事が始まる所は次のように書かれる。

地所の売買が済むと、時を移さず、浄水池の大工事が始められた。初めは畠の茶の樹や、野菜物や、樹木や、竹藪や、さういふものゝ取片附の爲めに、良太は忙しい月日を送つたが、それが略々済むと、市庁からは、市長や助役や技師や属員が沢山にやつて来て、先づ最初に、空地のところ／＼に土木の小屋掛をした。

種々なものの取片付をしたあとの広い地面は、荒漠としてさびしいものであつた。良太の整理した六万余坪、それにその他の農家の持つてゐる十万余坪、それが唯一目に見渡されて、其間に通じてゐる道路を人々の通つて行つてゐるのが小さく手に取るやうに見えた。広い地平線の上には、秋の色ある雲がふうはりと浮んだ。(三十八)

花袋の「六万余坪」は記憶違いであろう。先の岡谷の文章の通りだとすれば二万八千坪余りである。しかし玉川上水の水溜を淀橋に作り、東京市に水道を供給する水道事業の発展する様子が想像と伝聞によつてではあろうけれども、生き生きと描かれる。それは日清戦争の頃、日本の近代化が急速に進んだ時代である。花袋自身は江見水蔭のもとで小説修行を始めたばかりで、まだ何も始まらず、作風と言えるものもなかった。だが花袋は二十数年経つて、自分たち一族の歴史を近代史とともに絵巻物のように描き出すことに成功した。

## 2

岡田政十郎（花袋の父、田山鍋十郎）が上京して警視庁邏卒になつたのは明治七年一月で、小説では六年暮れに出でたことになっている。

おかねの里の兄からは、「田舎にゐたつて仕方がない。どうか方法を立てなければならぬ。老父はもう年を取

つたから仕方がないが、私はかうしてぢつとしては居られない。それに子供も大勢ゐるから、そのことも考へなければならぬ。」かう度々言つてよこしたが、遂に決心して、警視庁の巡查を志願して東京に出て来たのは、良太が其処に来てから三年目の年の暮に近い頃であつた。其時分、警視庁には、同藩の者が沢山に集つてゐた。中にはかなり好いところまで立身してゐるものなどもあつた。義兄はさしづめ下谷の坂本署詰を命ぜられて、取敢へず其方へ下宿したといふ報知があつたが、最初の日曜日には、朝早くから義兄が良太を訪ねて来た。(六)

このように良太は一族の拠り所となつて行く。しかし政十郎はまもなく西南戦争で戦死する。その前に政十郎の娘おてつが政十郎の同僚の巡查石川（モデルは石井収）に嫁いだ。旦那の妾のおつまが屋敷に移り住んで、その女中格として付き添つた政十郎の妹おつる（いゐ）が遣つて来る。が、本妻と妾との暗闘に巻き込まれてある夜、井戸に身を投げた。

あくる朝、人々はおつるのゐないのに驚いて、大騒ぎをしてあちこちをさがした。やがて誰も彼も庭の外にある古井戸の周囲へと集つて行つた。男が入つて行つて、水にひた濡れた、髪の乱れたおつるの死骸を引揚げて来たのを見た時には、「姉さん、何故こんなことをして呉れた。」かう言つて良太は泣いた。

「呆れた姉さんだ……」

かうおかねは叫んだ。(十二)

これは明治十一年七月一日のことで、政十郎の戦死から約一年後であつた。花袋は父と叔母を早く亡くしたのである。それから三年後の明治十四年、家族とともに帰郷していた真弓（花袋）は祖父に伴われて丁稚小僧になるために上京した。蛇足だが、花袋の生涯の盟友島崎藤村春樹少年が木曾から上京したのも同じ年の秋のことだった。

実を迎へた翌年の春に、良太の家では、また老父が真弓を送つて来るのを迎へた。

真弓はかぞへ年十一だが、本当にすると、まだ九年何ヶ月であつた。かねて頼んで置いた堅い丁稚奉公の口が旦那の方にあつて、忽ち話が纏つて、何時伴れて来ても好いとなつた。それは旦那の知人の別懇な士族から転業した本屋で、店は京橋の賑かな大通りにあつた。良太は、真弓が到着すると、二夜泊らせて、やがて老父の手から稚い

少年を離して、旦那の知人だと言ふある役所の属官の家を麴町の山王の下のところに訪ねた。そして其処からは、真弓はその世話をして呉れた属官に伴れられて、大通りの本屋の店に行つた。(十三)

少年録弥が祖父の穂弥太とともに上京したのは明治十四年二月で、満九歳になつたばかりで今でいうと小学校三年であるから本当の子供であり、分別もつかないところから売掛金をごまかして何かに使つた。叔母のおかねは激しく怒つた。

「真弓は一体、何をしたんだ。人の物を取るなんて、そんなことをしたのかえ？ お錢を取つたり、行先のかげをごまかしたりして、それで奉公がつとまると思つてゐるのかえ？ お前は武士の子ぢやないか。お父さんは、国のために戦死までした立派な人ぢやないか。それなのに、大それた、人のお錢を取るなんて何うしてそんな了簡になつたんだえ？ お錢が欲しけりや、叔母さんなり叔父さんに言へば、いくらでもやるぢやないか。おい、これ、何うしたんだ。黙つてゐちやわからないよ。」おかねは恐ろしい権幕で真弓をこづき廻した。

真弓は唯低頭してゐた。そしてをり／＼少年期に起るやうな不良なわるごすい眼色をして、ちよい／＼叔母の方を窃み見た。(十四)

この場面で花袋はかつての自分を露悪的に晒しものにして見せている。「寝小便の癖があつて、上さんに叱られ」て灸を据えられたことも書く。叔母にとりなしてくれた良太、懇々と教訓した旦那、奉公先に戻る途中に蕎麦をご馳走してくれた兄の実、こうした好意も結局真弓には通じず、「二度店に歸つたけれど、わるい癖は改められなかつた。」のである。真弓のすぐ上の姉のお勝(かつよ)もわがままな性格から使い物にならず、真弓とともに田舎に歸された。花袋の創作意識は社会や人間の頹廢、悪化、劣化そして死滅の底を浚うように人生の暗部を点綴していく。『時は過ぎゆく』という小説は、かくして人生の暗部をつないだ折れ線グラフ的なものになつてゐるのである。

石川と結婚したおてつは二番目の男児を出産した頃から病氣になつたため、田舎から母親が上京した。そして真弓について「あの時、東京から歸つて来た時には、まアこのすれつからし、一年の中に、かうも人間がわるくなるかと思つて喫驚しましたよ。あの時は、本当にあきれちやつた……。実や私に喰つてかゝるんですからね。東京といふところは、

怖いところだと思ひましたね。」と、上京して丁稚小僧になった花袋録弥少年が短期間のうちに不良化したことへの驚きを語った。貧乏士族の一族一家はこうして東京へ出て行くと精神的荒廢に至り、或いは病に斃れるのである。花袋の作意はこのように大正時代に意識的もしくは無意識的に近代日本のマイナス面や絶望、虚無に通ずる面ばかりを探ろうとする。それが花袋の作家的使命であるかのようにそのようなマイナス面に拘った。おてつの病は日毎に重り、明治十六年一月九日に三人の子を残して二十五歳で亡くなる。「野辺送りの日は、晴れた好い日であつた。石川の同僚や友人が多いので、会葬者は家の内外に溢れた。生花、銘旗、晒布にまかれた大きな墓標には、石川——妻てつ子、享年二十五歳と記された。幼い男の児が実と一緒に俥に乗つて、香炉を持つてついて行つたさまは、道行く人の眼を惹いた。」というような姉の葬儀の様子は、花袋は館林にいて知るはずもないので、おそらく後々兄実弥登に聞いたのであろう。花袋はこうして一番上の姉を失った。

次は良太とおかねの娘のお初（とみ）が従兄の実と結婚して死ぬことになる。その前に兄実が臨時修史局の書記に就職し、花袋一家は館林から再度上京した。

その年の暮近く、実は旦那の世話で、その同じ役所に勤める身になつた。月給は十五円、今は少ないがその中には段々上るやうにするからといふことであつた。実は長年世話になつた先生の本郷の塾から本箱やら行李やらを俥に載せて、取敢へず良太の家へと移つて来た。本郷の先生は饒別に唐本（たうほん）の文集などを呉れた。「ひとりで下宿なんかしたつて仕方がない。それよりも、家にゐて、此処から勤めに通ふやうにする方が好い。」かう良太もおかねも言つた。（十九）

兄の実弥登は明治十三年秋から六年余りも本郷弓町にある中村峰南の包荒塾に入門して漢学を学んだ。「ほかの友達のやうに、今の世に流行する英学を学ぶことは出来ないが、その代りに、漢学では、誰にもひけを取らないすぐれた学者にならなければならないとかれは思つた。体が大事だと年寄は言ふけれど、それを思つて勉強しないではゐられなかつた。」（十九）とあるとおり、実（実弥登）は時代遅れの漢学にしがみついて岡谷繁実の世話で修史局の書記になり、後に東京帝大史料編纂助員になつた。しかし時代遅れの漢学と修史事業は岡谷繁実というある種の傑物の腕力に振り回

された形で実弥登には逆に災いとなって免職にされ、また度重なる女房運の悪さも手伝ってついに結核で早世した。実の就職によつて岡田の一家は上京し、実の月給十八円と政十郎の恩給が年に四十六円で貧しい生活が始まった。そのうちに彦太と盲目の祖母が相次いで亡くなる。そして明治二十二年二月、実は良太の娘お初（横田とみ）を嫁に貰う。しかし実たちの母親のお幾（てつ）はしだいに飲酒癖が高じてお初に辛く当たるようになり、お初は病体となった。明治二十四年五月十四日、お初は「子癇と言つて、非常に激しい難産。」によつて重雄（真鉄）を生んで亡くなった。その前に実は罷免になる。おかねも良太も娘の死に目に会えなかつた。息子の実をお初に取られたように思つていたお幾は、慨嘆しつつも息子の非職の方に悲哀を感じた。

お幾の眼にも涙は見えた。しかしお幾の悲哀は嫁を亡した悲哀と云ふよりも、世路の艱難といふことに対する悲哀であつた。実は十日ほど前に、役所の大淘汰に罷められて、今月は他に職もないやうな身の上であつた。お幾にはこの生計不如意な時に際して、また、かういふ災害に遭ふといふことが辛かつた。東京へ出て、息子と暮すやうになつたら……と思つて、そこを万花乱れ咲く理想郷のやうに想像して、幾多の幸福を期待してゐたのに、……田舎での長い辛勞は少しも報いられずに、却つて更に悲しい辛い艱難と災害とがやつて来た。お幾は黙つて、堪へ難い悲哀をぢつとこらへて、良太やおかねの悲哀に對した。（二十七）

お幾は言うまでもなく花袋の母であり、『生』にその因業で性悪な様子が如実に書かれる。ここでも良太・おかねの娘お初の死を悲しむより自分の身の不遇ばかりを嘆くやうな性根の悪さが見られる。実の就職も間接的には良太のお蔭であり、すべてに於て良太夫婦の世話になつていながら心底から感謝するどころか、息子を取られたように妬むという依怙地な性質である。この辺りは身内に対して辛辣な目をそそぎ、自分の母ながら貧すれば鈍するの典型のやうな下層庶民の哀れな性情を強いて剔抉する花袋の筆致である。そう見てみると花袋のインセンティブの一つは「死ぬもの貧乏」という言葉に表れるとおり、死と貧困とを見つめる非情な創作主体の措定であらう。強いてそこに拘ることによつて厭世觀的危機に陥りやすいとは言えよう。そうして次の段階としてそのデカダンを克服するための契機としての恋愛すなわち芸者小利の飯田代子との愛の確執という虚構が大きくなる、そのような道筋で大正期の花袋の文学路線が少し

説明できるようである。

さて、良太おかね夫婦の長年貯めた預金が銀行の破産によつて消え去るといった不幸が起こるうちにも月日は流れ、既述したように角筈一帯は浄水場になることが決まり、良太の長年の辛苦の農園がなくなることになる。日清戦争の始まった年、兄は再婚し、弟克巳（富弥）は軍人不足が幸いして陸士に合格した。お幾は癌になった。花袋は漸く文筆で食えるようになる。

二十八になつた真弓は、その頃、何うやらかうやら書いたもので自分だけは食つて行かれると言ふので、実の家のすぐ裏に明家（あきぎ）のあつたのを一軒借りて、手廻りの道具は、二つあるものは、本家から分けてやつて、兎に角世帯を持つことは持つたが、その時分には、お幾はそこへ出かけて行くにさへ呼吸（いき）が切れて仕方がないと言つてゐた。  
（四十）

この住居は漱石ゆかりの夏目坂を上がつた辺りの場所で、『生』などに描かれる所である。その家で花袋は太田玉茗の妹りさを貰つた。兄は三度目の妻と結婚した。やがて母は腸癌により亡くなつた。「しかしお幾の死は、実の一家に取つては、平和の到来のやうに見えた。涙に暮るゝものは、お勝位のもので、誰の顔にも新しい生活と平和とに対する希望がかくすところなくあらはれてゐた。」（四十一）という母の死を悲しまない様子も『生』の終わりの叙述と共通である。『時は過ぎゆく』が『生』と違ふのは、その後兄が罷免され困窮し、病死する。さらに時は移つて明治天皇の死、乃木の殉死、大正に入つて飛行機が飛ぶところまで書いているところである。やはり注目されるのは、兄の死に至る過程は坦々とした筆致で書いているのだが、そこには重要な社会的事件が伏在したという事実である。兄の罷免される箇所は、「実は、母親が死んでから、三四年同じやうにして役所に勤めてゐたが、ふとしたことから、其処をやめることになつて、それからは貧しい不如意な生活が続いた。」（四十二）とあつさり書かれていてなぜ辞めたのか、自分の意志で辞めたのかも分からない。真相は岡谷の『皇朝編年史』が東大の『大日本編年史』を盗作したと疑われ、それを手助けしたと思われた実（実弥登）が誅首されたのであつて、花袋はそうした事件を全然書かなかつた。その点は岩永胖が「しかし、公判記録を読めば、証人として出廷した重野、久米、田中、三上等が挙つて岡谷の業績を過小評価しよ

うとしているところや、大学のみ業績でもないものを大学に独占しようとする企図を示していることは、その醜醜蔽うべくもない。すでに頽齡に及ぶ繁実に対してかくの如き拳に出で、あまつさえ史料編纂員、田山実弥登を窮死に導いた非人間性こそ、自然主義の闊将花袋にその究明と暴露を要請した最大、好個の課題ではなかったろうか。<sup>7)</sup>と問題視した所である。岩永は啄木の「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」(『スバル』明治42・12)の「田山氏は文学を人生に近づかした、さうして遠ざからしめた。」に続く言説、「さうして其処に、私の今の心持から言へば、田山氏の人としての卑怯があると思ふ。」と言った「卑怯」という言葉を引用している。しかし作中では「実は一番貧乏籤を引いたな。」という良太や石川の言葉に表れているとおり、実弥登(実)は真面目な勉強家で家族のために尽くしたがゆえに貧乏籤を引いたのである。それに続く石川の言葉、「しかし、をちさん、これと言ふのも、本当は御維新さへなければ、若い者がこんなに苦勞しなくつても好かつたんだ。おてつだつて、ここの父さんだつて、母さんだつて、皆なそのために、苦勞をして命を縮めたのだ。おてつなどでも、父が死んでから、何んなに、この家のことを苦勞してたか知れなかつたんですからな。目をつぶるまでそのことを心配してゐましたからな……。あゝ、實際、御維新は、士族に取つて、大きな打撃だつた。しかし、をちさんそれももう過ぎ去つた。かうして一つ／＼過ぎ去つて行くのだ。」という言葉に花袋の作意が籠っているだろう。つまり時代の変化に翻弄され蹂躪される人達の様子、その惨めな様子を通時的に辿ることである。その哀れな姿こそ真実なので、それを描くことは花袋のモチーフで主題、かつ又方法であつたと考えられないであらうか。士族が惨めであれば、町民百姓はなお惨めであらう。そして旦那(岡谷繁実)も年を取つてくれれば、職人たちからも欲深くなつたと蔭口をきかれるくらいで、さして違いはないのである。それが花袋の言いたいことで、『時は過ぎゆく』は兄実弥登が主人公ではなく、良太も流れ行く絵巻物に一貫して登場するというだけで主人公ではないのか。花袋のそして日本の自然主義文学は所詮その程度のもので、それを超えるものではない。

岡谷繁実は天保六年に山形に生まれ、勤王派の志士として幕末の乱世を生き抜き、明治以後は官僚として活躍した人物である。『浮世能夢』には吉田松陰を嗜めた逸話も紹介されている。足利学校や金沢文庫の再興にも尽力し、大正八



年十二月に八十五歳で没した。こういう人物は乱世の傑物で、常人の到底及ぶところでない仕事をする力を持っているが、周囲の人間はそういう大きな人物の動きに振り回され、余得に与る時もあるが逆に思わぬ迷惑を被ることもある。岡田実（田山実弥登）は修史の仕事を得て一時は禄を食んだわけだが、盗作事件の余波により容易く職を奪われた。実のような小役人が職を奪われて路頭に迷っても世間は無関心だし、大勢に影響ないわけだ。しかし実弥登の長男の真鉄（重雄）は、偶然だろうが『時は過ぎゆく』刊行と同年の大正五年六月に二十六歳で東京帝国大学史料編纂掛に採用された。その時はまだ祖父良太も存命していた。岩永胖は「大学が往年の非を認めての謝罪の意思表示でもあったろう。」と述べているが、これも結局は岡谷繁実の息のかかったた人事ではなかったのだろうか。この著作権侵害事件と裁判において大学と岡谷とは権力内部の同類の争いに過ぎず、その波をかぶって実弥登のような弱い者が割を食ったのではないか。それから十数年経ち、実弥登はとうの昔に亡くなったが、八十二歳の岡谷は健在で依然として隠然たる力を持っている、真鉄の就職の口利きをしたと考えられないだろうか。真相は不明だが、いずれにせよ真鉄も数奇な運命の下に生きたことは確かである。

こう見て来ると、花袋の視点は常に日々の生活者の生き死にといったレベルにあり、それを超えた観念や政治や哲学的な意味や意義や正義不正義といった領域には決して踏み入らない。大逆事件に触れることはあるが、慨嘆とか驚きのレベルを超えることはなく、直接に政治や権力を批判するようなことはない。飽くまでも現実生きる、主に下層庶民の生々流転に寄り添うかたちの作品を書いていくのである。そこから奥を覗いたり上を見たりすることはない。あるのは無常観的な諦念である。そこに花袋文学の豊穡が生まれたと言え、さすればこの小説はレクイエムであるのかと言うと通常考えられるようなレクイエムとは言えないだろう。

注

（一）『時は過ぎゆく』本文は『定本花袋全集』第六卷（花袋全集刊行会、昭和12・7、復刻版、平成5・9、臨川書店）を用いた。ただし全集本文には振り仮名が振っていないため、筑摩書房現代日本文学全集の『田山花袋集』を参照して振り仮名を補った。

補ったものは○付きとした。

- (2) 尾形明子『田山花袋というカオス』（沖積社、平成11・2）の「時は過ぎゆく」論に「あるいはこの一篇は、田山一族のみならず、歴史の波にただ翻弄されて生きるしかなかつたすべての生ある者、生あった者への花袋の哀切なレクイエムではなかつたのか。」という指摘がある。また岸規子『未完の物語 田山花袋作品研究二』（双文社、平成26・12）の「時は過ぎゆく」——良太の生きた時間——の中に「時は過ぎゆく」は一族の死者を弔うためのレクイエムである。」とある。早くに相馬庸郎は「時は過ぎゆく」について「年代記型小説とでも呼ぶべき様式」と論じた（『花袋再考——「時は過ぎゆく」を中心——』『文学』昭和47・9）。

- (3) 良太の上京は諸事情勘案しても明治四年であり、大火の三年前である。大火と良太の上京の日時は無理な付会があるようだ。
- (4) 岩永胖『『自然主義文学』における虚構の可能性』（桜楓社、昭和43・10）の中で、岡谷繁実の事績について詳しく触れられている。

- (5) 館林双書第25巻 岡谷繁実『浮世能夢』（館林教育委員会・館林市立図書館編集・発行、平成9・3）参照。『浮世能夢』の「緒言」に、「余今年五十五往事ヲ追懷スルニ一ツトシテ夢ナラサルハナシ因リテ身経歴スル所を書記シテ浮世ノ夢と名ツク明治廿二年五月 寒香園四狂」とあり、明治二十二年五月から執筆したことが知れる。館林市立図書館所蔵の『寒香園叢書』中に『浮世能夢』が含まれ、自筆原稿も存在することだが未見である。

- (6) 館林双書第23巻『岡谷繁実の生涯』（工藤三壽男、平成7・3、編集発行館林教育委員会 館林市立図書館）によれば浄水場に売った事情は次のようである。

明治二十五年（一八九二）寒香園は東京市水道局に浄水場として買収される。八町九反八畝十四歩が買収対象となっている。その代価は二万二千六百十五円である。

その他建物樹木の買い上げ代、移転料等を含めると三万三千八百四十円余である。

『時は過ぎゆく』の描写によると「七万坪からある広い地面」とある。青山夫妻や使用人の言である。「上水の水溜」に売れるというので、旦那も奥方もニコニコしていると描かれている。

また別に、「良太の整理した六万余坪とあったり、「なんでも七〇八万円になったっていうから」という描写もある。

少しオーバーであるが、繁実夫妻が喜んでいたのは事実であつたろう。

ところで買収のための実地測量の通達が、東多摩、南豊島連名の郡役所から土地の所有者へ発行されている。宛名は「正五位子爵秋元興朝」宛になっている。

(4) の岩永著参照。

(8) (6) の『岡谷繁実の生涯』の中から『皇朝編年史』に関係するところを次に引用する。

十九 皇朝編年史をめぐる争い

老齡繁実不屈の主張

明治三十五年（一九〇二）一月、東京帝国大学文科大学教授三上参次は同大学附属図書館において、近刊された『皇朝編年史』をたまたまひもとして同書の文章が『大日本編年史』に似ていることに気付いた。

そこで同大学史料編纂掛の一員田中義成に詳しく調べさせたところ、『皇朝編年史』六巻のうち、第四巻の後半、第五巻の全部、第六巻の前半部分は、『大日本編年史』の第一巻より第二十四巻に至る部分と、ほとんど同様であることが判明した。この時点では六巻である。事件後全九巻が発行されている。

『皇朝編年史』は繁実が明治三十三年十二月出版した著書である。出版に先立ち、金沢文庫と称名寺住職村岡融仙の連名で、この書の利潤は悉く金沢文庫の拡張に献金すると東京紙九社地方紙四十五社、雑誌六社に予約申し込みの広告をした。

『大日本編年史』は、明治初期の官設の歴史編纂所であつた修史館で、明治十五年（一八八二）より編纂を開始し、その後官制の改廃に伴い、東京帝国大学史料編纂掛が、これを継承し編纂中の未完の書である。繁実はその以前明治十一年（一八七八）から同十九年まで修史館に勤務していたので、繁実も同書の編集業務に参加していた。

大学はすでに退職していた繁実を呼んで、謝罪を要求したが、繁実はこれを拒否した。結局大学は明治三十五年（一九〇二）三月四日、東京帝国大学総長山川健次郎、代理人弁護士原嘉道名をもって、繁実を著作権法違反として、東京地方裁判所検事正川淵竜起宛告訴した。

『皇朝編年史』の前記部分は、『大日本編年史』の前記部分の剽窃または多少の改竄あるいは補正を試みたものであるという

理由であった。この事件は『館林市誌歴史編』にも記述されている。

同年三月三十一日花袋の兄田山実弥登は、共犯者であるとして同大学の史料編纂掛を免職された。『皇朝編年史』の資料は実弥登が大学より持ち出し繁実に提供したというのである。

実弥登は繁実が官制の改廃に伴い、明治十九年修史館を辞めたとき、繁実の推薦で臨時修史局へ就職し今日に至っていた。臨時修史局は修史館の後身であり、のちに東京帝大史料編纂掛となる。これがのちに昭和四年（一九二九）東京帝大史料編纂所となるわけである。

同年四月検事局は繁実を取り調べ、起訴を決定した。繁実の自邸、勤め先氷川神社々務所を家宅搜索。その年繁実は官幣大社鎌倉宮々司より官幣中社氷川神社宮司へ転任していた。自邸からは何もでない。氷川神社の自室からは「史要」という繁実の備忘録を押収している。

繁実の住所は寒香園を東京市の浄水場に売却したあとも、豊多摩郡淀橋町角筈百四十三番地である。なおまた職業について、後半の記録は「無職」、「無業」とあるが、始めの記録には「水車営業」とある。

翌三十六年本人および証人の訊問が続き、二月十九日東京地裁予審判事森井良策名により「本件を東京地方裁判所軽罪公判に付す」の決定が下された。

繁実は起訴に対して明治三十七年七月公訴不受理の申し立てを行ったが却下された。九月さらに、控訴したが大審院は控訴を棄却した。しかしさらに再上告をし、再び却下となった。繁実は執拗に抵抗し己の正しさを主張してやまなかった。

結局、法廷に持ち込まれ、同三十七年十二月より翌年六月まで、本人、関係者の訊問が続行され、同七月判決が出た。残念ながら結果は「罰金百円に処す」であった。東京地裁第一刑事部公廷において、裁判長判事今村恭太郎名である。繁実はこれを不服として控訴を行ったが、明治四十年十一月東京控訴院刑事第二部裁判長判事牧野菊之助より「原判決を取り消す。罰金百円に処す」の判決であった。繁実は屈せず、さらに上告をする。

問題は、大審院に持ち込まれたが、明治四十一年一月、東京帝国大学は、告訴の取り下げに及んだ。これにより大審院第二刑事部は裁判長判事法学博士井上正一名をもって、免訴の判決を申し渡した。

実に六か年の年月が経っていた。

(一) 史料権の帰属の問題に発展

繁実の主張は一貫していた。

『皇朝編年史』の問題箇所は、自分が修史館に勤務していたとき、編成した史料である。決して剽窃などというものではない。その史料はもともと元治元年（一八六四）より明治三年（一八七〇）にかけて自分が収集編集した「通史」がもとになっている。

修史館時代の自分の担当部分は、自分が掛長となり、部下に命じて、この「通史」に更に追加修正したものである。なお、田中義成も部下の一人であった。こうしてでき上った史料は当時「史稿」とよんで、修史館内で史料として利用されていた。この史料をさらに久米邦武が漢文に訳したのが『大日本編年史』である。

自ら収集し編集した史料を自らの著書に引用して、何故剽窃になるのか。

当時の修史館には、重野安繹<sup>やすゐ</sup>、久米邦武、田中義成、星野恒等二十人ほどが業務に当たっていた。三上参次、小中村義象、藤井甚太郎、黒板勝美、三浦周行、辻善之助、渡辺世裕、和田英松らはこの後の人たちである。

この事件の弁護人は次の人たちであった。花井卓蔵、鶴沢総明、岡村輝彦、山田喜之助、播摩辰次郎、塩谷恒太郎らである。大学側の証人はすでにあげた、三上、重野、久米、田中らである。利用者いずれも錚々たるメンバーである。裁判長名は前記のとおり、他の判事名、検事名はここでは省略する。

問題の核心は一言にして言えば、それは「思想の梗概」史料の官学または国家による独占」につながる問題であった。

本来公開され、学問の進歩に活用されるべき史料を、帝国大学の権威で独占しつづけることの可否の問題である。いわば「国家の史料権の帰属の問題」にかかわる問題であった。

『大日本編年史』には独自の思想はない。従って著作権はない。しかし『皇朝編年史』には独自の思想がある。そしてそれは『大日本編年史』とは相入れない思想であった。

岩永胖『自然主義文学における虚構の可能性』という著書がある。同書は繁実が幕末維新期尊王攘夷の志士として、朝廷の

ため主君のため……それはまた国のためでもあったが、「無限の服従と忠誠」を尽くした事実を克明に追求し、繁実の心情と経緯を実到的確に捉えている。

そしてその上で岩永は、花袋がこの事件を、なぜ「ふ。と。し。た。こ。と。」程度にしかふれなかつたのか。自然主義文学が、社会と人生の真実の追及にあるとすれば、花袋はなぜそれを怠つたのか……と、花袋文学の問題点に迫る名著である。

啄木もそのような花袋を卑怯だと批判した（「きれぎれに浮かんた感じと回想」）。

「ふ。と。し。た。こ。と。」というのは、花袋の作品で島崎藤村の『夜明け前』に匹敵するといわれる『時は過ぎゆく』にでてくる語句である。

「実は母親が死んでから、三、四年同じようにして役所に勤めていたが、ふ。と。し。た。こ。と。からそこをやめることになつて、それから貧しい不如意な生活が続いた」

「実」は実弥登をさす。なお上記の文中傍点は筆者。

長男ゆえに自己を犠牲にして、一家を支えてくれた兄実弥登がいなければ、花袋はあり得なかつた。兄も、自らも、種々世話になつた郷土の先輩が遭遇した不幸な事件に対して、花袋はなぜか、社会的にも、人間的にも言及をしていない。

実弥登は失職後、職を探したがなかなか見つからず、繁実の写字生に再び戻つたりしていたが、肺結核に冒され、明治四十年十一月四十三才の若さで貧しさで悲運のうちにあえなく病没する。